中村俊定文庫
文庫 18
322

其義信古秋之部

稲妻　甘棠子

稲穂の代

其日くの細工物

禪悟一言發智

山雀も智恵付

輪切けく　五麗子

中村俊定文庫
俊定藏

立秋

立秋の淀投投出す一葉哉　臺簫

あつまるもうつくしい一葉の力哉　丹志

ゆく雲の岸い岸迄さの秋　田社

初秋や麻の上ゆく舟の上　杜谷

暗夕と赤くなる水や秋の秋　茶外

少稜を一灯ゆるぐ波の波　連尺

うつの杉鶏出へ枝打る音哉　宮羽

初秋の淀芦ゆ富士の雪　杉雨

ゆく風や淀ゆき寺の板屋　獅三

物干や仲秋の月ゆ花　幸和

目ゆくゆく秋ゆゆる一葉哉　甲府　逸府

提灯ゆり蛾の出ゆる一葉哉　小田原　黒人

三日月ゆ眼あてゆ一葉哉　文尺

乞巧奠　天上浪漫　曲似汐

河ゆゆく水と巴の乞巧川　米仲

七夕や巴波の舟の一艘　樓川
敷島や星の貸借四倍高　鶏口
二星うしの角みなかの松ふる　田社
角ふるる如作の海も只一枝　連城
常夏の橋うるはしや玉の川　紀流
机の塵乃亦生新一枝永　百太
星合や関とかるる人さらし　外撰
川越の四乃をけや何の川　硯雨

堀堀のわくの川　紀貝
角角くの永代橋や星一夜　移竹
凉しさ浅尺きるるや天の川　茶船
玉琴や寄さふる猫を仇と星　宮羽
いろいろふるる七夕星めぐる　速尺
武蔵野や茅ヶ崎の川　丹志
七夕うしろやさしき高ヶ松　芸集

稲妻　花火

いとまも雪くはりや小松原　時丸

猶書やそてに雪むすの袖　小田原　蘭江

いなにやはゆるそてに隅の物　社蘭

稲つまやつらめは消る雪の雫　長兼

いなつまや雪の狐の鳴るこは　盛方

稲妻の紙は尺せる園の宮　丹志

雪ふるこそ尺せる雪の玉　小田原　平芳

踊

海ちかき夏の船しはとり　立雪

たちつれ出る月の面の夕べ　長兼

月代のあふとよる音ぶり　新伸

やり袖の踊の中の雲の那　交巻

を身ふ現はなるはとり　小田原　藤四

松陰に捨を身る踊る　円　蓮角

角力

蘭とり時をおせて角力　平沙

むこうく嗜みふりを角力れ　游牛
足洗ふ女房りかり辻ふ角力　中村
かつ屋ふ母のこるさるお撲ふ　田社
紙の蚊乃人こ嗜入るちまふ　杜谷
大男ふろやふ角力取　丹志

玉柔

喊ふ拘い池ふり抜ふ足　鶴口
ふをこ乞れ踏ふく見柔　祥祥

柳鶴も布袋もみしふ芸成　丹志
鼓波女の片ふ仕ふや玉柔　五梁

菓子

鶏卵と朝食ふる小饌ふ　紀逸
あさ顔や蕎ふ生ふ芝者　東篁
菓や麻衣ハ尺を足ふ　小西来　錦江
何さらほの墨ふ花の香ふ　帆瀬
朝点の中押けて賀ふ角　系郁

あさくれ一社 諏訪の社 文祝
女郎花よりて 定めし恋 紀貫
萩より高 郎女の 櫛川

左踏山、萩ゑよりて

山ハ高 萩より出て 織る車 丹志
萩の戸や 四こ高て 咲故 江島
ゑ初て 作く結白 萩の泥 艸雨
雲ちて 月の角 萩咲 宣路

大石より 時とよく 萩の花 田社
蘭の雪や 雪ふも二つ 神たも 紀逸
色雲や 尾花 芦より 池そく 社 祝宗
芝 色 り ぬ れ り 稲や 社 の 塔 嘶常
陸ハ十八 町や 艸乃 雲 翰東
咲て 西 神ふ 色 紀 紀 紀遷
唐織 詞 山 苗 巴 丘
業平の 馬 時 熟 日 花 外

入れの帰人もなかよ春野うる　青里
朱雲くく戻り春うぐひす　丹鳳
春くれ入日紅る花北窓　杜谷
鶯乃やあしの後も春一つ　子蕉

野分

達れい家も枝つく北分　橋川
赤極い麦面新の野分　赤廷
新蕨や夕雲ないつて笠の上　白村

船頃の麦乃蜂や北分　宮羽
蓑ゝ拂ゝ風の俤や初春　尚年
紙風の翼よ麦に小て赤　素石
阿ふ手や笑ひ人の後乃数　徒牧

八朝

八朝やすゝしい家む猶乗之　紀逸
八朝や月のかまを先若初　丹志

虫

日ハるや日無不著を吟ちめ　丹志
出やし出まる雁やる山　文朗
かゝるさまち雁ぬ友やきりす　貫呂
塩干のみゝ向ふ市や雷の音　宮羽

初雁

ちつ原や江戸の別業八仙島　甫棠
初原や二人あるまゝ歩まゝ　紀逸
塩満く浪ふく

苔清や汐も新し合の沖　丹志
ちつ原や雁の影出つ入つ　茶郎
初うゝや米の和尚も閑の秀　魚舟
ちつ原や弱歌堂の後ろ　百須
初原や菊園さんの淀堂　田祐
ちつ原や小ゝ南つく塩干　羽仲
梁の音やおもく雁の二ツ三ツ　米石
枯枝のはうまゝ原ふ春　友洲

川竹に雲の小枝や雁のこゑ　春英

月

名月やおもしろかりし榻の下　紀逸

古今一憾

古よ世のゝ下くらくやさて月尺ゝ　鶴口

名月や光ゝ出雨よりの毛　丹志

此夕は花見て月見ぬ　杜谷

古の物ぬ人の世あやふの月　市宝

片腕ハ琴に寄かゝりぬの月　田社

めん月やうろくゝ交くらう雲　茶か

名月の夕ゝ雲ハ火とり出　蓼子

新月ハ西ハ雲と雲ゝ小和ぬ　神祐

姑も雲の角ゝやけふの月　路舟

名月の仕合ものや蓮写舟　古津

名月やゝ紅ゝ樹乃葉と白る　藤逸

ゝふの月尺ゝ人やゝ衣　女蘭香

落ても沙つ一穂ちるや夕の月　田女

夕ゝ秋と新の京中や寺ふの月　祇河

名月や膳のとゝきく萩の露　逸葉

笑い月や窪き抜る如く影　小田原　麦由

月哉や影も三丑の云ふ対　里樊

横ハ何蛙ふて吹やとゝの月　伊勢　急士

名月や逢くゝ二人寝ぬこ　岱竹

荻萩の叫ふ新ふる月見ぶ　琴月

雨も亦くゝ面ふやけふ雲月　一歩

京中ふる文ふ墨ふと月地ふ　葵桂

罪なくしふる月見ふや佃島　楊樹

蕎麦畑の二架も面ふ一初月抜　尾張　理然

月ハ淋や花蔵の三日ふる　山田　猪魚

鍋ふ〻く猪の月見や猪ふ　冲而

起林と月ふ仕入ぬ蔵ふ郎　嵐鱗

数生長姫の修り日ハ花如　故紅

斤勝よりの里ひくえてくるの月　文尺

影をくらく僧よりの月　紀貝

出羽国の山にあるこの月はこれ
月にくらくしんと云る古歌をうらく
先達京師よりおくれ給ひおて

石山をはくらくるやくるの月　丹志

を流発して京都を殊高
をうらく文通よりをへる句

石山の石を角いくる月くるく　道原

ちとい病らくふの月又聖堂　寒和

万年橋の言橋より空化い眼下より
一事ふよりふ

蓑の言は新のくらくるや鯛小姫　湖十

一とをを西池より新橋
くるくるくるく

蓮の実や橋も恐忘れ　丹志

碓

くるくるくるくるくるくるくるの雪れ　再嗔

鶴本れくるくるはくるくるる　鶴口

機織も吟や麻布の小扶張　こう場

ふも二人花より好ふあめるか　小田原　麦由

初汐　新流

うつ汐の音も聞ゆる岩陰　湖十

山を立つき矢の島も新流か　秀信

栗山子　鳴る

雨風の音やかしこの弓流し　卯雲

風のまを取り直す栗山子か　川井　和雪

秋義の響と聞かしうれ　日　楓和

塚詣りぬこうつる栗山子か　小田原　乗人

かしこもせ盛ハあり稲の色　丹志

瓢箪と説かしかしこ　遊也

一ちの山の面く鳴る蛙　蓼兼

見立世よ深るれば鳴る紀郷

詣さ結ん連うつ枝のなるか　信白

鳴るか　かるる柱れ　以為

いかく雪　鶴ふ頃る日知哉　紀彩

小島　廉

望月は稲の留よ鶏の　湖十

明るき松とあるの夏ふるる　君蕉

鶏や相模よ木々の陸奥　多翁

稲ふるとゆくやぐや百姓家　小田原　磧多

松枝ふる南ふる鶏の夏　日　朱明

七歳の居所なる

鶏なくや清ふる枝の廉　丹志

屋敷山や明る居出来て廉の夏　梅川

ほうふる百枝ふる原廉れ意　祥

いつ山も深て花廉のふる花　芝光

廉の夏陸邑ふる懐ふる那　相雲

ふる明ふる清や廉の入仕度　許人

ふる秋ふる廉れ詠　柏宇

菊　芭蕉

寸法と庵して松ふる菊南　樓川

生破の雨ぐもや菊の時よりも　挿霍
きくの香や八十路働く賢斗包　基策
片脇り井の底ゆ菓の出　昴和
菊のいと果い有名ゆ記　和　半雨
かれ花の門も訪ゆや菊花　帆星
古塘ぬ人と屠ふやゆく畠　古竹
丸狐や暇入ま人の菊乃ゆれ　万貢
隠逸家の頻乃ゆまりや菊花出　蔦鞠

ちぐ菊の名ゆれとらや大きな　烏暁
ゆきぐり花て時ゆ つ和　古楚
菊の名ゆ敬へ他ゆり反ち　川サキ和タ
本徒代者よ飯やきくの径　十四ゆ和水
菊ゆ者や穿ゆ月ゆ星月抜　敬仲
考ぐ為ゆ紅い菓や者ゆの毛　菓分
第一の酒り味ゆ抜ゆく乃客　丹志
昴星ゆ徒ゆ人伝ぐ宮花　紀遥

辻書の以くさ草や菊の忠　花遊
ことの葉ぬ春ぬ二度咲菊ぬ　田社
人身とん一夏栖のとまぬ　桃水

後月

てらく星も猶ち十三夜　冥明
後の月雲ぬ入る折の入る折　紀逸
相の葉ぬ芝ぬ許ぬ十三夜　田社
俳諧の後乃月ぬ名ぬ　丹志

月ぬ出ぬ裏ぬ伊達ぬ雲ぬ
十三夜月ぬ頼ぬ元ぬ乃ぬ　臺策
稲ぬ刈ぬ稲州ぬ後の月　敦仲
人影の角ぬ人ぬ影乃月　連尺
後船の腸ぬ玉の光ぬ月　紀見
外の如ぬ人ぬ後十三夜　青路
山里ぬ魚荷ぬ来ぬ後の月　湖丸
ぬ人ぬ影月ぬ後の月　甲斐万稿
ぬ人ぬ影月ぬ後の月　出羽宗何

手据ふ鳥やけふの名月　小田原 由益

梅の後待てふたとし十三夜　曲蓬

粟稗も乏しくならず草の庵と詠じ閑寂のことを友とする人は大原の[illegible]ぬし也けり　座に栖原山深き[illegible]の庵[illegible]へも[illegible]仕官の身乃[illegible]るさる[illegible]と悔くもの[illegible]まれ[illegible]法師の風流数寄[illegible]世の[illegible]人の[illegible]やまはりて時の[illegible]五列に[illegible]の[illegible]の[illegible]月[illegible]の[illegible]庵に[illegible]山の[illegible]風[illegible]の[illegible]

ゆかしさのこと[illegible]し十三夜　許人

夜寒

兄弟とうち[illegible]る夜寒かな　芝光

仕手小田原巴丘亭にて探題

曉も[illegible]　丹志

鶴の羽[illegible]　小田原 和楓

春居の[illegible]　山田 敏之

紅葉　[illegible]

海晏寺の休教を切きるおもふに　梅川
星ひろひ乃ゝ子ゝ子ゝ小深ぬもみちかな　程祥
弱ゝしき白ゝ山ゝ山ゝ　数之
りみちの人や家きふ祖の如ふ　墨兼
ろ〳〵と冷泉やあん落もこち　麗宋
淋しさもちさしくやむ〳〵紅葉　小田原　未白
狼の声ゝ白ゝ山ゝ遠ゝ　日　菊外
冬盤木ゝ陰ゝ枯ゝ花ゝ　李葉

陰ゝ白ゝ山ゝ引ゝ　花流

暮秋

秋ゝ行ゝ先ゝ〳〵ゆけども前ふふ　冥路
山川ゝ郷ゝ水の色や紅のさし　小田原　巴丘
水色い能ゝ能ゝ　秋ゝ色　立守
風ゝ寒の経ゝ力ゝ　清ゝ　丹志

子夜吳歌

秋風や清ゝ水ゝ入ゝ　程祥

[illegible] 紀貫之
[illegible] 兵部
[illegible] 苗山 笑
[illegible] 理空
[illegible] 許人
[illegible] 源十
[illegible] 鶴口

歌仙

[illegible] 立雲
[illegible] 立志
[illegible] 立宜
[illegible] 立守
[illegible] 立机
[illegible] 雲

傘法の門弟にて小松原　宣
入院へこんと徒のあるき　浮白
那須なる松林に寄る相夫婦　老
郭公鳴く　緑は白い抱き　佳夕
天狗の厨に行く法の数　吉
毒茸の口なく眼を暴す　志
唐の月蕃夷に泊来又近く　宣
後の袷に冊子の紋　老

女位置に色ハ花の如秋の水　吉
原中　中に恨仕迫なり　白
美尼なる度ハ合点て花の京　志
百鳴の鹿乃武士　吉
答意を捧て仕為る雑るて　宣
蓑笠持てこいと虎豹　老
七夕牛ハ板の脇に搭き　白
六部に出て中子に祝ふ行　れい

[illegible]

又西[illegible]

[illegible]の角に[illegible]の巨[illegible]

月を眺て[illegible]

[illegible]

倘後三[illegible]

千鄙の大[illegible]根の[illegible]

日[illegible]を掬[illegible]

[illegible]

[illegible]

三つ[illegible]二つ[illegible]

口へ[illegible]面白[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]袋少[illegible]

[illegible]の内へ這入る[illegible]

[illegible]

元仙

天地のあはれ康正や菊の華　遍月亭　宵棠

隙も黄ばめる霧哉　丹志

淋しさのいつ紅葉する西の山　紀逸

野ぶ紅の人絶や田社

蕎の目表乃樹の紅葉　丹志

年々浪の花と素山　紀逸

唐とゝとせいて冥くく雨と紅　社

山おろしおぼて嘆嘆も　棠

紅葉女人とかもてと竹の花　逸

男禿のおとこ山　社

大伽藍拵く掃は寒ると　棠

梢とはみさら沢十月　逸

羽ぬくとクハ鋼のまりめけて　社

江戸一番鶏鳴る　棠

以前まゝ宿る屋敷八坂の上　逸

招立て設す檜の明る月　社

孫よるに并て老の寒こゝろも　棠

先ゆくうめる歳の湯殿　社

雪の中鶯の鳴ひとのひく　逸

むかしの大坂今もあるさら　棠

後ゝも其名乃名ちの不人れ　社

吹ゝ作ゝ恋ゝ尾ゝ出る　逸

朝ゝ上ゝ巳ゝ十五日　棠

鶴のゝんも角ゝまの沓　社

大ゝ寒ゝ入ゝ木綿ゝ取ゝ　逸

雪ゝ降ゝ氣ゝの強い　棠

鶯ゝ水ゝ流ゝ暗ゝ流ゝ　社

至ゝ鷹ゝ取ゝ乃ゝ　逸

落月招ゝて行ゝ戸ゝ見ゝ　棠

融ゝのぬれて行ゝ雲ゝ　逸

火も亭沢傘とゝ傍さまる如葉　棠

ちっと人伐押付る達　逸

砂濂乃咄の写り雪しゝあ　社

日知らぬふ猫の手拭　棠

恋の下万面拭う雫ゝり　逸

雨のうゝ石の水姫　社

其屋作古多を紙

時雨

芝物りかさこ半を吋面ゝ南　紀逸

九重ゝ美宮とゝ[illegible]　臺蕪

樗ゝも吋ゝ面伐ゝ雫ゝ乎　丹志

筋遠ゝ精の色ゝと吋面ゝ乎　杜谷

吋ゝ花葉ハ出ゝ嗜ゝ姉面乎　茶外

志ゝ彩ゝ雫の氏乃出事乎　数仲

静さい高を隣のしられる郭　芝浦
高く響く光明極く時雨　紀貞
秋乃雨乃ふ一夜紅てちれ　甲斐　逸斎
苔の咲梢を隠ふしまる　青岳
山寺の夕仮ふる時雨うれ　小さゝ　綿江
一ちゝ拾者ゆ雨て和者　日　浮魚
青苔乃ものに自ら初時雨　日　卓雨
ほゝしゝと嶋の屋ふ時雨　湖丸

星未不乃ふ時雨を鄰くふん　故任
深う袖く松こ伴年ふ　青路
姉ちゝふ多を金和る時雨ふ　佳夕
ちの茅隈取ふ高ふ和　兎舟
松つふ人成育てしの主　田社
ちゝふ時雨ある拾ふ　紀敷

燒　鄰

板著ゆ口ふふ恒の白　花遊

[illegible] 由松

[illegible] 鶴島

達摩寺忘 出雲禅寺へ招き参らく

[illegible] 丹志

[illegible] 和雪 川嶺

芭蕉忘

芭蕉忘の此よ高きる小蕉ル 臺菊

世尊ゆ[illegible]い[illegible]ル 紀逸

[illegible]ル 鶏口

[illegible] 杜谷

[illegible] 徑祥

[illegible] 丹志

[illegible] 田社

雪中庵爲尋ゆ[illegible]三回忘 拐物

[illegible] 未[illegible] 白峯

十月[illegible] 許人

[illegible]サニ[illegible]　樓川

[illegible]　紀逸

世翁晩年[illegible]孤哀

[illegible]翁[illegible]人を[illegible]　丹志

法命講　十夜

造り[illegible]　紀逸

[illegible]者[illegible]仏を[illegible]十拍子　東翠

[illegible]山[illegible]十拍子　蘭江

[illegible]拍の[illegible]　巴丘

馬士辭　亀拍子　文尺

[illegible]の人[illegible]

くもるにて人儀の釜ぬりすず縄を結ぶ乃ぞ
木樋成嗜み折しも忍みるまるのうちもいと
多摩の男目ゐ水めぬくりの如乃裏ふちふ
百尺の深身とちゐ縄ゆの松ゐ抜しい沢瀧の
茶縄ゆうもしあるハ茶底の松より花くゝ犬とつまこ
又板ゐ水ハ門ゐ戸ゐ乃ゐ松のいとりてはゐる
浅とくゝてゐもしこ茶あめきゐの浪りゐ
説宣の為ゐいふゐ松女郎茶の名ゐめてい

かの通路乃欲あるもいゐ世ゐ世ゐなる為ゐし
那須野時ゐ野を抜ゐ茶ゐけて弱ゐ茶向
而ゐ為ゐ新ゐ記ゐゐいやもゐ水ゐに罪ゐる
川ゐ思ゐも河字くゝ唱へゐゐ神佛ゐぬ為く
ゐとゐゐれい横茶のくゐくきせるも蝶通の四郎い
人面ゐ水ゐ世のゐしゐ人のいゐあい島井の茶
風ゐ字捨て口の級乃ゐゐ皆ゐ松ゐ世
喧嘩ゐくゐ色くいゐとゐ為ゐ水ゐ茶ゐ

もうハ乃宮なるとゝ如川合和歌の恋路もあれと
ゆゝしくほくるゝの風俗ゝ殊ハ且又萬もて
数を為ゝるゝ事ハ神ゝの麿をとゝぎゝ多の麿ゝ法し
又懐紙禅の場我ハ学もれもゝろゝ
学ゝるゝなれまゝに事所一きいんすもく一生
我俗之時り学せるゝるとゝゝやゝて加ゝ
辞ほくるゝまなん

鄙説　丹志

越氏ゝて藪澤ゝ
敷ゝ志ゝ海ゝ体ゝ墨
中年居ゝ為翁ゝと
学ゝ石之陽居を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

吟醉て閑事を好
と為養子と表方の
母志々丹山を志屋
蘭く市し赤き海苔
料をしのくとおぢの

七十義をつのり年波
試笑く業を拾ひ
年を重て七十寿也
頼ッたもし

吉原 重尾

落葉

掃き捨てし小庭と思ふ落葉哉　秋雨
襟もとに立ちよる襟の秋ちかし　萬貞
汐騒に角つくる落葉哉　許人
落葉して夕の風を樓ぶかな　芝光
松ぐ〳〵敷めて落葉の秋　来至
落葉ちる夜ふけの雨ぞ寒しかり　采都
鐘の響き都まで聞ける秋　官洌

面と焚火の庵に落葉ふ　文硯
山門に入る我袖も秋ぞ　帆隣
掃き寄せて焚く落葉哉　文明
晩稲の穂を取やる落葉哉　由画
うめくて公よと不二のたちし哉　五原
庚嶺の宮ハ嶺に落葉哉　田社

木枯

吹ぬ日も大丸松の梢　丹志

風流笑ふを注ぐ弁の多　横川

拍子　菊かしら菜

宵まくれ木枯風く枯の面　湖十

嵩の庵くるを言ひ（焙ろ）て

ちりしれ高野ゆ落葉哉　紀逸

風ひなるさゆる学れ寺　呼風

こがらしや一りぼっち軍の松　鶴末

山茶花　枇杷茶　帰蕉

山茶花や夕陽ゆ掃の宿　徒牧

ちる花ほ[illegible]なくて[illegible]の[illegible]　湖常

野原は眠ひけりつ[illegible]志　宮羽

色々の鳥も面白ひ蕭　丹志

生海　嵐

雲のうれ[illegible]と[illegible]ると[illegible]　横川

有て中[illegible]ゆ面白ひ力[illegible]　由蓬

笑ひ都へ出て生海嵐ゆ　百古

蒲團　衾　帛衣

我こそは衾を笑ふ蒲團哉　臺嶺

角のこと物ゆへ寒かるべし　茶外

後ろ髪馬を追ふ蒲團哉　一歩

程なく蒲団と云へる衾の雨　卯雲

寒しかな　枯野の寒さ紙衾哉　立卷

多賀へ寒を踏こむ蒲団哉　立津

枯野

極の寒や枯野の遠入くら　許人

寒鴉ひとり鳥ひとり踏る野哉　丹志

出る月も入も枯野の小　鶏口

この秋の弓ひかるを枯一木　艸雨

野を枯る新宮寒き　理空

尺四方に孤の戻る小春の那　以水

寒さうな人を照らす枯野哉　交苓

寒影と角のむかひの小春哉　巴陵

大根引　麦蒔

甲子浅草寺大根曳　獅三

麦蒔や野いちごの人乃ゝ　平蕉

ひき蒔や日徳と菜の花　丹志

水仙

蛇隠の道作るや仙の水　櫻川

水仙や花咲中なる男のる　葵桂

去年ゟ思ふ昌なる水仙哉　小四郎　麦田

石蕗咲　みち丹

山の井ゟ蕗ゟ咲いの毛　竹人

切法の奥ゟ咲ゟ咲ん　宮羽

恵法須講

代ゝ書居ひとゝ有名詩講　丹志

東かゝ家ゟ久しゟ松魚ゟ　茶外

火鉢　巨燈

打ゟ手ゟ一ゟ火ゟ御ゟ　外撰

撫子の露とはなるる　丹志
人問ぐ別猿尺を玄人達　文尺

千鳥

船とまるもむかしやおもかげ　甘棠
礫うちするよ和くたくたる　墨策
夫向てゝ行んとすいまるよ名ぞ　紀敬
己が名を夫ゆゝ帰やいよ名　紀流
おくの紫ふ現入くたくたる　連城

宵闇の川音高ひ　里契
さびしく我家を鄙ふ　小田原宗何
川音を夫ゆゝ吟ずおたる　日高
松明や渡る角をく陶手音　以水
連ふ日如定おたる　一歩
暗陸よ漁色術よ漁ふ　貫呂
たゝとゝとゝ吟ずや伏見川　丹志
高原ふ角ハ也ふ陸ふ名ぞ　素石

立涼よ身を入れて多年　湖十
笠り風流凄く吹石の影　連尺

霜　露　敬　氷

霜の田や人柄変る弱の年　白桐
まこと家を狐のぬける素枯れ　紀貝
風呂の煙いうまりてあれば　磧水
神々よ人なれよ嚴小紋　志静
檜桐の素枯れと枝りの神武　鳥翔

かれ行敬の富へ部屋あるまま　硯雫
巻り水や弟ちなれく初氷　丹志
一節を作しい沙魔氷の那　馬麿
もとの水の河の山の初雪　鶏口

水鳥　怪滅ちく

多多和筏の累ハ行柄川　田社
うつ魚ハ汐の山と蕭壺亀　帝宝
水多江畠を出く日和哉　敬仲

[illegible]　紀遷
[illegible]　小田原　和水
水鳥や身暮れて[illegible]　同　黒人
[illegible]　逸幸
[illegible]　蜻庸

小春　炭竈

[illegible]　官路
[illegible]　琴月

[illegible]　小田原　芦角
[illegible]　同　燕四
何[illegible]　山田　数之
[illegible]　[illegible]外
[illegible]　紀貝
[illegible]　丹志

冬籠　冬蜆

[illegible]　紀逸

本意の有様をよくあらはす　堤雨

京都を別して行やわらかなり　幸和

殿さまの自ら忘れたる春霞　春里

石垣をとゝのへやわらかなり　雷子

網を引れ苞を高く高く　島曉

裏行よ家もまばらや冬ごもり　小田原泉十

灯火ぬれ已ゝわれもわれもの隅　立宣

顔見世　春子ら吉原にて

都人の二丁ぬけ自粉の角　孜仲

ほうとう皆浮世絵の名ゝ　和楓

都人せか月顔をよ橋掛り　藹迷

月見ちゝ世サロンをとゝけ　再嘆

寒ゝ

逢妻のうとうとする屋さき　湖十

世人の笑ゝて寒し　係少宿　紀月

妻夫婦炭切りをさむ　默斎

灯火れ猶うるひなく雪はるる　秀億
雪の色水よりはなさしをる　真鼎
神かくれ[illegible]の寒さ哉　川サキ　楓和
外罠の曙おらくはなさふ　小田原　露貫

遠尾巴鶴

かりがねも雑兵みれ別る哉　紀逸

雪

雪ちらは今の自もや三日の月　寥和

初雪ふり沙弥まて出る揚ふか　紀逸

一とき初雪尺と積て降れい

ちらす雪や大と云字を消て書　丹志
はつ雪や鰹ちぼさる紀物ら　臺策
新糸と屋て来りん初深雪　喜黄
初ゆきや弁のちらふる社　嵐竹
はつ雪や傘ハなくとも二三丁　紀見
初雪よや屋ふ雀の足はあと　樓桂

初雪や石ども袖に乱れ松に入　徒牧

降きくや小笠と起く六の花　梅宇

さつ雪や我ら鋤ひもつとる行　小西来白

隠居ゆや先踏かるゆるの石　川崎和夕

友くの雪おもひ馬本貴　甲斐萬稿

雲より八入口ゆきの雪　硯阿

月番り鉢山を雪ん水　相重

雪ふく鉢日ゝよん雪まつけ　文尺

ふる雪に松ふみのる河ふ水　鼎和

傍内より金山ふ仏の雪　居燕

拾徒の雪さん命ゆれ雪　馬場

こけ高て雪ふくき雪の仏　五梁

雪の鉢を食の石ゆも雪ふ鉢　蘭馨

爛文字開炉裏ふ歩や松の雪　蝶庸

地名雪裏　雪ふ裏陸へ
拾ふて紙とゆる

拾ふて紙しもの裏ふの居　丹志

初雪や墨絵出来る松の那　文麻呂
雪の目も覚いつる日の光　桃水

述叩　寒念佛

踊りこの世の闇やくらく紀　湖十
法角交回しの外おあけ　紀逸
はらくき水弱い友の物角　冲而
飾初なりはこれも恋仏人　宇帯
相とかき書おれ紙や書名仏　雪杭

鬼の高仏画讃よ

大津馬追うて書名佛　丹志
時雨を見ぬ仏や叩く祈り　梅川

寒梅　寒梅

寒梅や汲の井よ琴弦張　菓外
うん梅の白ひ市の廣り外　青白
寒さいやまる蕾れ名ハ外　山笑
石蕗のよりと戻ぬ花の縁　花外

八つ時ごろひ御ぶの梅　龜雄
来る人を待て結ぶやむろの梅　江鳥
かん寒やきびしくわるるの言　女芳香
ぞくるの訪ひる沈や滝の音　端州
永夢ゑ能かゝ滅やゆくめ香　雪羽

歳晩

岩木集る加茂山法の社人小　致之
枯さゝ小判を拾る沈を　臺策

きのふ見あとの雪　涇祥
節季ゆゑ沈ゆゑ沈ゆゑ沈ゆゑ沈　白糸　朱明
山吹は新坊ゆゑ出す品ゆゑ　田女
餅のゑよ宗祇ゆゑ結ぶゆゑ　嵐翁
酬ゆ雪も拍明やゆゑ　連尺
山ゝ先笑ふ　風ふ　大雄　丹志

出居丹當　長徳寺

よ小踏なれとくの弁よ人くとも　蕉仙和尚

京高なりは色まを　乃うくひを

山時雨

山くれの色れ出ぬ時雨　おるく

ふるしくれも袖や濡らん

江上霞

写も茅よおよはなみの江乃　まん女

うすくくと海とる浪のあけぬ

炭俵未惣

かゝる際のなゝ世こゝ中川出　おれく

姉くなちきりに角のむしろ来

漢和歌仙　元顔

花ノ　弟ノ　弟　寒ー菊　舞民

食魚乃寵のくれくれとも　弩　永渓は艸民

進ー上　者　三ー種　魚光

到ー來　酒　一ー樽　綉葉

海のなな國もくれ目ぬて　艸

新菓くるこ蕚ぬ月ーわ　魚

小倉山ニ牡鹿(サヲ)繡
大蟻宿ニ虎(トラ)魚(フジ)蔡
常り旨ふ物もとめと思ひ侍ル々
月ゥ物ものうるの記(ウル)い魚
六月の庵さん寒くなりぬる々
ゆ菓ものもとめ侍ル袖ハ繡
思ヒ指ニ誠ニ難レ有州
身ヒ請偽(ウソト)奉ル存魚

事ゥ変ヒ物ものとうるとれ繡
高ものの菓ものの皆ものの恋蔡
登ル柳ニ蛙ハ妙ヒ句々
喰ル麥ヲ雁ハ名ヒ言州
羽衣を脱ぐ変ひ伊ひハ々
事を差ぐ面るうる京蔡
俳ヒ連群ニ白ヒ畫ニ魚
碁ヒ敵寄セル黄ヒ葉ニ繡

色〻の笠のうちもたるを下艸

初あらしなる沢やあいくる豚窠

臼 仮ー橋ハ不レ轉セ秀

車 造ー道ハ無レ援ク艸

星ハ北ニ騒ク跳リ子窠

月ハ西ニ眠ル廻リ髪カフロ魚

赤情恰ず山のかはきくさ

某雅まくらの名ゆえる原元係

集ニル路ノ辺ニ児笹艸

遊ブニ坪ノ内ニ媛ヒメ蟠ユリ窠

鶴を鞍ルるあ氏水ちく魚

地以り再山聖護院村猿

暫ク芝ニ枇ヘギノ制ー札ム

為もさしく山へり氏去丹志

大尾 四季唫

梅

岩ハしるや深く住の梅の花

月社所　柔徳子

解

松風〳〵吾書習ひ眉間

月

ものゝかゝるく皆の月花

枯野

吼尽て大の月高よう秋ぜる

後序

世居の如くよひつれ翁あるものの
趣ハ記よくハ記れたるものさ
くらなハ此の是ハ伝れた
まことに無用の業ときみ事う
応報ニ云用れ用行れなは
此後序もて、有用の用ハ行れ
うさ虚ハ翁ハ押しかた

歌仙をとりて下よりまるく
そのうら角澄の姿をもるる雲
句をとりて書して行をも
落ちて友垣の金寒暖の
をつれなさへすれば世界よ
おさむをも張果の妖術を
ひろげ橋中の翁の造化に
うちふ類をあつて西行古雅の

無為をもとハ思ひ理ハ
主人宗はの懐紙雲紙探をも反
下不杯の冊子紙をすぼ
ぬの功を思ふ杯を見て
知りてあやしかれの
品物をかをも歌をあと
人をは品をの態ハ
尾花の海郷紙をする酒あれ

世の人瓢箪とゝいふ僧
南渡り庵中に葫蘆を植
え給ひ国う清云のきゝも
なき武宣州の太守蕭源と
相とを得給ふ事ありしかの
毎読み入給ひ此
瓢を得失足相の西遊は
あり給ひ思ひ給ふなる

元亨代の清和殿と
一所あり給ふ所に
相を命じ給ひ一大雅瓢と
いふ元を動なる所也
木樵庵樓川殿のいとゝ
殊勝なり

書成日
寶暦四甲戌歳
春二月

校合　紀逸
杜谷
茶外
文尺
執毫
鞞說　丹志

江都書肆　本町三丁目
萬屋清兵衛